

第14回「泉大津オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

コートをもとったかし

我妻 啓一・山形県米沢市

十年前から、私は夕方の散歩を日課にしている。いつも決まった農道を歩くことにしているから、あまり人には出会わないが、田植え、消毒、稲刈りなど、あちこちの田んぼから年中機械音が響くので、静かということはない。特に秋は、コンバインの音が農家の歓声も合わせているように聞こえ、なぜか人がたくさんいるような錯覚を起こす。

昔は、秋になればどの田んぼにもかかしが立っていたものだ。かかしに害獣払いのまじない効果があるのかはわからないが、一束の稲、一粒のコメに命をかけた稲作人の心が染みているようで、何とも奥ゆかしい。だが、最近かかしはほとんど見かけなくなった。

そのような中で、私の散歩コースに毎秋、一体のかかしが立つ田んぼがある。その田んぼを耕しているのは、かなり高齢の男性だ。一反歩程しかないが、よく手入れがされ、ヒエなど雑草が一本もない。田の畔も草が刈られ、いつもすっきりしている。コメ作りに対するひたむきさが伝わってくるようだ。その男性とは、会えば会釈をする程度だが、彼の柔和な表情が、私と心安い間柄のような気にさせてくれていた。

その田んぼを、今春から若い人が耕作し始めた。私は、その高齢男性がコメ作りを続けられなくなり、息子が継いだのだろうと勝手に想像していた。その人が、高齢男性のように丁寧な管理ぶりで、田んぼを美しく保っていたからだ。

夏の盛りを迎える頃、私はこの田んぼに今年もかかしが立てられるだろうかと気になっていたが、それは杞憂だった。ある日、立っていたのだ、あの優しい表情のかかしが。そして、私は今までのように、かかしにお辞儀をして通り過ぎた。高齢男性にしたように。

ある雨の日、私は雨合羽を着ていつものように散歩に出かけたが、かかしに近づくにつれ、胴体の色がいつもと違うことに気づいた。何とかかかしが立派なコートを羽織っているのだ。その姿に、私の心は驚掴みにされた。雨の日に、かかしがコートを着ている。

翌日、いつものように散歩に出かけたが、かかしはコートを脱いでいた。畔で男性が腰を下ろしていたので、私は名を名乗り「コートをまとったかかしに、初めてお目にかかりました」と、声をかけてみた。男性は、名を広司さんといい、予想していた通り、息子だった。父・隆夫さんが冬に急逝したことで、会社勤めをしていた広司さんは田んぼを受け継ぐことにしたのだそうだ。私は、「かかしにコートとほいいアイデアですね」と、初対面だったこともあり、和やかな会話になるよう言葉を選んだのだが、広司さんは、意外に淡々

と理由を語り始めた。

広司さんは、小学四年時に母を亡くした後、隆夫さんと二人の姉、病気がちの祖父母と暮らしていたのだが、生活は大変困窮していたそうだ。姉たちは中学校を卒業するとすぐ就職したが、広司さんだけは高校進学をさせてもらえた。高校入学時に、制服以外は、自転車、時計、靴など叔父や叔母が入学祝で買ってくれた。ところが、入学式直前になって、友達がコートを準備していることを知った広司さんは、隆夫さんにコートをせがんだそうだ。高校生誰もがコートを着るわけではないし、家計事情もわかっているのに、である。

入学式前夜、広司さんは、玄関にコートが下げられているのに気付いたが、それは、隆夫さんが若い頃なけなしの金で買った一張羅だった。隆夫さんが持っている衣類は、このコートだけが高価だったが、隆夫さんは「このコートをお前にやる」と言ったそうだ。しかし、広司さんは高校生に似合わないそのコートを手にしなかった。隆夫さんは、そんな広司さんを責めなかった。その後、お互いにコートを話題にしなくなったという。

今冬、隆夫さんが亡くなり遺品整理をしていると、箆筒の下の引出しからコートが出てきた。広司と名前が刺繍で縫い付けてある。色褪せているが、間違いなくあの時のコートだ。広司さんに着てもらえなかったが、隆夫さんは、自分の物ではないと割り切ったのだろうか。隆夫さんは、子どもにも口調は柔らかで、意見を押し付けなかった。広司さんは、父が極貧の中で出した答えに、せめて「ありがとう」くらいなぜ言えなかったのか悔やまれると言う。

広司さんは、田んぼを引き継ぐことに決めた時、かかしは隆夫さんの身代わりだから、寒くないように雨の日にはコートを着せたいと思ったそうだ。自分のコートを掛けてあげたいのだと。

私は、その話を戸惑いながら聞いていた。まだ、素性もわからない私に吐き出したいくらい、広司さんは長い間、苦しんでいたのだろう。